

LET 関東支部だより

外国語教育メディア学会

第45号
2010年3月発行

.....

英語教育への提言

英語教育と機器と考え方

外国語教育メディア学会 名誉会長 浅野 博

1. 「ハード」か「ソフト」かの問題

あるラジオ番組で、「新聞やテレビなどのマスメディアの報道を信じますか」というテーマをリスナー参加で議論していた。大勢は「信じない」ということのようにだった。最近の政治不信がこういうところにも反映されている感じだったが、私は新聞、雑誌、テレビ受像機、ラジオ受信機といった「ハード」が悪いのではなく、「報道の仕方」という「ソフト」の問題であろうと思う。例えば、鳩山首相の発言をそのまま伝えるのではなく、「またも首相の発言ぶれる」といった見出しをつけると編集者やプロデューサーの主観が表現されることになる。そうすると国民は首相への信頼感を失う。したがって、「ハード」とか「ソフト」とかの1語で考えるのではなく、多様化した内容を分類することを考えなければならない。

もっとも、英語教材の場合は、少なくともレベルや目的に応じた分類はできているはずで、「これは高校1年生を対象にした『聞き取り教材』」といったことは、利用する教員は意識しているであろう。CALL教材はどうかというと、これまでの録音教材やビデオ教材とは違った問題点があることは、これまで以上に意識しなければならない。コンピュータは個別に学習者に対応できる面があるので、教員の指導とは別に、学習者の自学自習の意欲と能力が多分に要求されるのである。しかも、そういう基本的な要素は機器を使わない普通授業で習得しているべきものなのである。

2. 日本語を含めた言語学習環境

日本にいて外国語を学ぶ場合は、母語を含めた言語環境が学習効果に大きく影響する。そういう意味では、どうも好ましくない環境になっていると私は思う。「カタカナ語」の氾濫、日本語の誤用、間違いだらけの英語多用の歌など好ましくない要素が多すぎるのである。政治家や評論家は、“compliance”とか“incentive”といった英語を解説もせずを使う。受験意識の強い高校生は、基本的な語彙も知らないくせに、呼応した単語を覚えようとする。

その上、英語教育を論じている書物には、「こんな英語を使ったら英米人に笑われる」という劣等意識の強いものから、「堂々と日本式英語を話せ」といった自己中心的なものまで相反する内容のものが沢山ある。「どういう英語を学ぶべきか、教えるべきか」という問題にも見解の集約はできていないのである。一方では、全国的に画一的な教材と教え方を強要する学習指導要領が存在している。先ず英語教員が率直に意見を交換し、できるだけ問題意識を集約していく必要があると思う。

3. 現場からの発信を

最後に、鳥飼玖美子氏（立教大学）の「現場からの発信を」と題する呼びかけの一部を引用して終わりたいと思う。英語教育に関係するほぼすべての問題と広い視野を簡潔に、明白に指摘している点をよく味わってもらいたい。

『英語という外国語を専門にする私たちは、世界における多言語状況や少数言語の闘い、言語と人権、文化とアイデンティティなどにも目を向けた上で、日本人と英語の関係を複眼的に省察したい。グローバル世界の共通語は英語、という説を鵜呑みにするのではなく、その意味するところを深く考えることで、冷静に英語と向き合い、どのような英語を学ぶべきなのか、教育すべきなのかの指針を英語教員から社会に向けて発信しなければならない。』〔「英語教育」2010年3月号 p.41〕

—英語教育工学の勧め—

外国語教育メディア学会 関東支部長 見上 晃

外国語教育メディア学会の目的のひとつは英語教育に科学の視点を入れることである。LETがLLAとして発足したときは新しいLLという機器の効果的な利用法を考える学会であったかもしれない。しかし授業とは何かと言う事を考えずにはLLを考えることはできなかった。

授業を科学的に分析して内容の提示、語彙・文法の理解と定着、エッセンスの抽出、練習、習得といったいろいろな要素を見つけてきた。そこからプリラボ、ポストラボといった概念を作り上げた。さらに授業をスキーマ作りという点から考察して、予備知識、予測といった要素が加わった。教科書に写真だけがあってその写真に関連して知っていること話し合ったり、そこから予測できる内容などを予測したりすることが授業の要素として加わっている。

ただ単に授業の表面的な進め方ができるだけでなく、授業の背景にどのような事があるのか科学的なメスを入れて効果的な授業をすることがLETの目的となっている。学会を外から見ている人の中にはLETはコンピュータの研究をしている学会だと思っている人が居る。たしかにコンピュータの研究も行っている。授業を考えたときに「ここでコンピュータを使うと効果的だ」ということはある。しかし授業に必ずコンピュータを使わなければいけないという学会ではない。

「工学」という言葉は「工業」を思い出させるのか「教育工学」というのは何か機械を使うことだと思っている人が多い。確かにテープレコーダ、LL、ビデオ、コンピュータといろいろな機器の利用法を考えてきた。しかし教育工学とは授業を科学的に効率的に進める方法を研究するものである。もしある場面で機器を使うより人間がやった方が効率的であると思われるなら機器を使わないのが教育工学的には正しい。

長い間、研究会で授業研究を行ってきたが、教育工学の学会で発表するのだから何とか機器を使おうと無理をしてでも機器を使おうとしている授業があった。効果的に使うことと必ず使うことは違う。

また授業での機器の効果的な利用法を考えた思考法を広げれば、ネイティブスピーカーにどう授業に参加して貰うのが効果的かということも考えることができる。ネイティブスピーカーは機器だということもつりはないが、授業を考えると我々日本人教員も含めて学習者に何らかの情報を提示するメディアだと考えることはできる。

対象とする学習者を中学生、高校生、大学生から年齢を上げて大人にしたり、年齢を下げて小学生にすれば生涯教育や幼児教育に広げることができる。

今後も表面的な現象だけを見るのではなく、その奥に潜む「なぜ」を考えるような科学の視点で見た英語教育を進めていこうではないか。

LET 関東支部第 123 回 (2009 年度) 研究会報告

神田明延 (首都大学東京)

今年度の秋の大会は、再び地方開催となりましたが、このところ交通も便利になり、関東からは日帰りでも参加できるようになった仙台での開催になりました。そして秋深い 11 月 14 日 (土) に、東北工業大学で開かれました。会場は真新しい校舎で、理系らしい機能的な教室作りが印象的でした。

さて、今回のテーマは、ちょうど仙台周辺の 17 の大学が連携して e-Learning 事業を文科省の戦略 G P の採択授業として展開しだしたこともあり、「授業の連携の果す役割—仙台圏 17 大学をつなぐ e-Learning から学ぶ」として、授業を e-Learning によって連携することによって何ができるかを模索するものとなりました。



今回は午前に行なわれた研究発表・実践報告では三つの発表が行なわれました。それらをまとめれば音声教材のため

の語彙分析研究、教材の adaptation の問題、メディア利用とカリキュラムの関係など少ないながらもバラエティに富んだ発表内容で、各会場で活発な議論、やり取りが行なわれました。

その後開会行事に引き続き、長野大会以来のランチパーティーが行なわれました。これは地方開催で終了後の懇親会に代わるものでもあり、午前の発表者と一般参加者で意義ある交流が行なわれたようです。また同時に展示業者による賛助会員プレゼンも手短に行なわれました。



午後の初めは、特別講演として会場校も含む仙台圏 17 大学で行なわれている連携 e-Learning の現状と課題について、その中心者である井上義比古氏 (東北学院大学) より講演をいただきました。そしてそれを受けて、言語教育の立場にそうした e-Learning を最適化していくかを中心に、授業とオンラインの e-Learning の役割や、双方向的なコミュニケーションのあり方、サポートの重要性についてパネリストと会場で活発な意見交換がされました。ただ、e-Learning といっても幅広いので、ある

程度的を絞った議論が今後期待されます。

その後、閉会行事で終了ということで、コンパクトな大会でしたが、様々な学校行事や各種学会開催で忙しい時期の中、50 余名の参加者を見て、地方大会としては盛況な秋の大会でありました。

普通教室でもヴィジュアル・エイドを

吉住 香織（埼玉県立越谷南高等学校）

高校は授業で扱う言語材料が多い。限られた時間の中で、intake を目指す言語活動を効率よく実施する工夫として、筆者は簡単に準備できるヴィジュアル・エイドを利用している。CALL や電子黒板とは無縁の普通教室で、筆者が行っているささやかな取り組みを報告したい。

1 intake に効果的なヴィジュアル・エイド～黒板を見ればポイントがわかる！

使っているヴィジュアル・エイドは①写真や絵 ②単語カード (=flash cards) ③idiom 一覧表 ④target sentence strips、さらに ⑤項目に応じたチョークの色分けが加わる。いずれも簡単に準備できる。導入する新教材に関わる①～④には全てマグネットを付けているので黒板にすぐ貼れる。中心的な役割を果たすのはA3版に拡大された①のカラー写真か絵。たいていは教科書の口絵や写真、準拠のCD-ROM データを使うが、時には Google や Dave's ESL Cafe 等、無料写真画像も利用する。テキストによって選び方は変わる。expository 形式の英文ならメッセージ性の高い写真を1～2枚、narrative 形式なら話の流れを象徴する挿絵を2～3枚を目安に考える。下手だが自分で描く時もある（生徒は寛大！）。④は3文以内、重要構文や topic sentence が多い。ここで⑤が活躍する（<例>重要事項は黄色、文法事項は赤、慣用句は蛍光緑他）。①～⑤で黒板の大半が埋まる。見れば学んだ内容が思い浮かび授業ポイントが伝わるような板書計画を可能な限り心掛けている。

2 イメージと音と文字をつなぐ～タイミングと組み立てが重要

これらのヴィジュアル・エイドを、授業のどの段階でどのような提示するか、授業を組み立てる際に効果的な場面とタイミングを考える必要がある。大切なのは音声を伴う提示をすること。僅か1枚でも写真や絵は大きな力をもつ。oral introductionで投げかけた質問に生徒から様々な反応や発言が返ってくる。写真で始めたinteractiveなやりとりを通して生徒を題材の世界に引き込むことができる。ここでkey wordsも導入する。②を用いて音声、意味と共に文字との結びつきを図るのである。内容理解や説明時には③～⑤が加わる。また新語の口頭練習ではcollocationを意識させるために、黒板に貼った②を利用して文字を書かずその場で前後に語句を加えた練習を行う。視覚刺激を利用しながら oral/aural drill を段階的に行うプロセスを辿れば、内容想起と語彙定着、両面から効果があがり、学んだ事柄の定着=intake をよりスムーズに進めることができる。なお production 活動用に配布する worksheet には写真の縮小版を入れてあるので自習や復習時にも黒板に示した内容を再現しやすいようにしている。学んだ情報が長期記憶に蓄積されることを期待しつつー。



3 自己研修もヴィジュアル利用～気軽に授業を録画する

自分の授業を生徒と教師、両者の視点で冷静に分析・検討するにはビデオ撮影が一番である。ヴィジュアル効果を利用した授業であれば尚更、見る側の立場から授業を改めて見直す必要がある。筆者はクラスを変えて学期に2～3回、授業をビデオ撮影する。目的を伝えておけば生徒はいつも通り授業に臨んでくれる。とはいえ終わってビデオを見れば、授業改善だけでなく自分自身のアラが気になってしまい自己嫌悪に陥ることもしばしばである。しかしこれが一番のモニターで、効果的な自己研修であることはやはり確かである。

Eボードを初めて使ってみて

石井 亨（江東区立深川第八中学校）

1,きっかけは区の設置から

江東区は各中学校に E ボード(SMART technology 社製)とプロジェクター(EPSON 社 EMD1715)、P.C.を 2セット 配布してくれた。本校には英語室があり、そこに E ボードを設置した。(注 1)

E ボードで Power point が使えると聞き、それで中学 2 年生の比較級指導教材を作り、指導を考えた。画像は Internet やスキャナーから取り込み、USB フラッシュメモリーに教材を保存し、配布された P.C.に貼り付けて使用することにした。

2,比較級と最上級の指導から

(1)テニス、サッカー、バレー、バスケットのボールの絵を Power point で E ボードに映す。

T : Tennis balls are small. Soccer balls are bigger. Volleyballs are bigger. Basketballs are bigger.

Soccer balls are bigger than tennis balls. Volleyballs are ….

(2)比較級に続いて最上級も導入した。

T : Soccer balls are the biggest of the three. Basketballs are the biggest of the four.

(3)そして以下の文を Power point で E ボードに提示し、理解を確認した。

Basketballs are <u>bigger</u> . より(大きい)	Basketballs are bigger <u>than</u> tennis balls. ～よりも	Basketballs are <u>the biggest</u> <u>of the</u> four. 一番～ その中で
--	--	--

(4)次に関東地方各都県の図を一瞬見せ、その大きさについて問答するペアワークをした。(注 2)

A : Which is smaller, Tokyo or Saitama ? B : I think Saitama is smaller than Tokyo.

(5)次時からは教科書(Columbus 21 光村図書)の後ろにある絵を使って比較級・最上級の語い練習を入れると同時に E ボードを使い、as～ as…を指導し、pigeons と swallows の比較、cheetahs を加えて最上級で、ペアでどれが速いかを言うペアワークの活動を入れた。教科書指導と並行して、この活動を単元の指導中に継続して行った。

単元のまとめとして、さらに比較級・最上級の辞書指導を入れた。

3,使用して見て

<長所>

- ・画像を効果的に使うと生徒の興味を引き、授業に集中させることができる。
例えば、画像を Oral work に使えば、教師は手元で操作でき、E ボードに生徒を集中させることができる。画像の切り替えも瞬時にでき、Oral work の量を確保できる。
- ・E ボードに文章の提示をすると、板書より時間の節約ができる。
生徒たちからは、見やすく、わかりやすいという反応が多かった。

<留意点>

- ・E ボードはある 1 つの場所に設置して、使用するのがよい。授業ごとに移動させるのはたいへんだ。
- ・そして、生徒のどの席からも見やすい位置に設置する必要がある。

(注 1) 電子黒板設置場所



(注 2) 電子黒板の画面 (ペアワーク教材)



児童情報をデジタル化して教材に

青柳 文男 (宇都宮市立清原北小学校)

5年生の授業です。「誕生日」をテーマに日付の英語に触れさせるのがねらいです。児童は既に月や数字の英語について学習しています。また、事前に「英会話の時間」(週1回の授業に対する朝15分間の補充)で、日付には序数を使うことを説明しています。

最初に月の言い方の復習クイズを行いました。“What is the first month?”のALTの問いに、児童が“January”と単語で答えても、“Oh, the first month is January.”と文で返します。月の名が出るたびに、その月のイラストを黒板に貼っていきました。

主たる活動では、前もって集めておいた児童の赤ん坊のころの写真をPCからスクリーンに映し出します。画像を部分的に隠す機能を使って写真の一部分を見せ、“Who is this?”と問いかけます。誰の写真かは本人だけしか知りません。答が出なければ、“Do you need more hints?”と言い、隠している部分を少しずつ取り除きます。例えば“Taro!”という答えが出たら、本人に“Is this you?”と確認し、重ねてALTが“When is your birthday?”とたずねます。“February three.”と答えたら、“Oh, your birthday is February the third.”と序数を使った文を聞かせます。担任は“Taro’s birthday is February the third.”と言いながら、黒板に貼った2月のイラストのわきに「3 Taro」と書き加えます。

授業の終わりの方では同僚の幼少期の写真を交ぜました。子どもたちは最後まで興味を失うことなく活動に参加していました。また、“Who is this?”の問いかけも、ごく自然な状況で子どもたちの耳に入ったと思います。



ICTを用いたストーリーテリング

築島 淳（宇都宮大学教育学部附属小学校）

子どもたちには低学年の頃から本の読み聞かせを行っています。英語との出会いをスムーズに行いたいと考え、外国語活動の1時間目から英語の絵本の読み聞かせを行いました。絵本は「The Very Hungry Caterpillar（腹ぺこ青虫）」で、だれもが知っている話です。食べ物や曜日など、日常生活で聞いたことのある英語がたくさん出てくるので、この絵本を用いました。プロジェクターで大きく映し出し、画面を見やすくして提示していきます。同じ提示の仕方では「飽き」と悪い「慣れ」が出てしまうと考え、その後の授業では、絵本の一部をマスキングし、そこを問いかけながら読み聞かせました。こうすると、絵本の中に出てくる物の名前や色、数などを繰り返し聴いたり、考えながら画面を見るといった、子どもの集中した楽しそうな姿が見られました。

別の活動を紹介します。2月に行われた冬季オリンピックの公式ホームページの動画を音声なしで提示しました。提示しながら、児童に簡単な英語で問いかけ、これまでの活動で扱った英語を用いて説明していきました。時事的なものに新鮮さや興味を感じたのでしょうか、子供たちはいつも以上に教師の語りかけに集中し、聴き入っていました。画面で情報を共有しながらですから、やりとりも自然に行えました。

これからも、提示の仕方を工夫した実践を行いたいと思っています。

外国語活動を担任が行う際には、視覚にも訴えつつ英語に触れさせることによって、子どもたちはより関心を高めながら、英語に「慣れ親しむ」ことになると考えています。



e-Learning研究研修部会

塩谷 幸子（法政大学）

2009 年度第 2 回研究会として 2010 年 3 月 13 日(土)に東京外国語大学で e ラーニング教材の検討会を開催いたします（3 月 7 日現在）。学習者の学力低下に伴う自学習の必要性から e-Learning 教材が注目を浴びています。最近ようやく教材の種類も増えてきましたが、そのコンテンツのみならず、カリキュラムへの組み入れ方や学習効果など、問題は多岐にわたります。当部会では今後様々な教材を取り上げ、<e ラーニング教材研究会>として数回に分けて検討していく予定です。

今回はその第 1 回目として、多くの大学で導入されている ALC のネットアカデミーを取り上げます。ネットアカデミーを全学挙げて使用されている東京外国語大学の長沼先生に「NetAcademy2 の利用による副専攻英語教育補完のための自律学習支援プログラムの開発と課題」と題する講演をお願いしております。教材の有効な運用例などについてお話を伺います。参加者の皆さまにも日ごろ感じている疑問に答えていただけるよう、意見交換に多くの時間を割き、じっくり話し合ってください。

e ラーニングへの注目が高まっている今日、当部会は新しい情報や意見交換の場を提供し、ますます活発な活動を続けてゆきたいと考えています。今後取り上げて欲しいテーマなどございましたらお気軽にご意見をお寄せください。 kantoel-owner@yahooogroups.jp

教材教授法研究研修部会

久保田 章（筑波大学）

当部会では本年度会員も増え、総勢 11 名となりました。地理的に東京地区と筑波地区に分かれての活動とならざるを得ませんでした。それぞれ活発に研究と実践活動を行いました。部会の大きな活動テーマは、「学習者の主体的意識を喚起するための学習指導環境作り」で、特に認知と情意という 2 つの面を意識してアプローチを行ってきました。

その一環として、前期の 7 月 18 日には、筑波大学の George Robert MacLean 先生に講師をお願いし、“Classroom Feedback Systems” というテーマで、新しい教育メディアとして注目されているワイヤレス型のフィードバックシステム「クリッカー」の教室における効果的な使用方法について研修を行いました。参加者は約 20 名で、実際にクリッカーを操作しながら、教室内の英語学習において指導者－学習者間だけでなく、学習者同士が認知と情緒の両方向に及ぶ学習空間を共有するための方策について理解を深めることができました。

下期には、筑波地区では、学習指導環境の中心的構成要素としての教材に着目し、特に認知面から教材のタスク編成について勉強会を実施してきました。Rod Ellis 著 の *Task-based Language Learning and Teaching* などの文献を適宜読みながら、TBLT の基本概念や効果的なタスクの作成方法などについて検討を行いました。

また東京地区において会員が行った研究としては、韓国教育放送公社（EBS）の英語専門番組や大学受験の番組の分析や、英語力が比較的低い学習者のためのディズニー映画を利用した教材の作成などがありました。

学習環境研究研修部会

石川 洋一 (日米会話学院)

語学教育の現場でLL 関係の機器をどのように使うか。そのシステムの限界をどのように見つけていくか、またどうすればうまく使えるのか。

これらについてHP 上でレポートを公開していくという形で活動しています。

私の学校(日米会話学院)でAdiLL-1000(アンペール社)を導入したこともあり、このシステムをうまく使う方法について考える、という形になろうかと思えます。

09年度は、通訳の授業で主に「Drill&Review」の機能をどのように使うか、という内容をまとめようと思っていました、時間がとれず作成を断念しています。

そこで改めて、10年度では、AdiLL-1000の総まとめを考えています。

LET 関東支部のHP 上にレポートを載せる予定です。ご覧になってください。

AdiLL-1000をお使いの方、また導入を検討している方々の参考になろうかと思えます。

学習環境研究研修部会では、今後も実際の機器を提供していただいて操作に慣れる、機能を試してみるといった場を提供していきたいと考えています。私の学校でも随時見学を受け付けていますので、ご興味のある方はご連絡ください。

早期外国語教育研究研修部会

岡澤 永一 (暁星小学校)

早期外国語教育研究部会では、去る2月27日土曜日に、暁星小学校にて、「小学校英語活動と電子黒板の活用研究会」を開催いたしました。当日は、30名を越える公立・私立小学校の先生方や教育委員会の方々、教材会社の皆様などの参加を頂きました。

今回は、二部制とし、第一部は、「小学校での英語活動で大切にしたい視点」というタイトルで、中部学院大学客員教授の久埜百合先生にお話をいただきました。小学生の特徴をふまえた英語教育の大切さを理論面から説明された話は、会場の先生方に、実践を裏付ける情報として、参考になったのではないかと感じています。休憩をはさみ第二部は、「電子黒板を活用した小学校英語活動例」というタイトルで、私が日ごろ児童と共にこなしている電子黒板の英語活動を紹介しながら、小学校英語教育の視点をふまえた活用時の注意点をお話しました。その後の質疑応答では、活発な質問や意見がでて、大変実りある研修会となりました。今後も早期外国語教育研究部会では、電子黒板と小学校英語を主なテーマとし、電子黒板教材がいかに子どもの学びを補助できるかを考え、活動を進めていきます。

XXXXXXXXXXXX 編集後記 XXXXXXXXXXXXXXX

★ 年度末の忙しい時期にもかかわらず、多くの方々のご協力を得て、「LET関東支部だより第45号」が発行の運びとなりました。心から感謝申し上げます。

2010年度はLET50周年記念全国大会が開催されます。

大会は8月3日(火)～8月5日(木)、横浜市立サイエンスフロンティア高等学校で行われます。

この50年(半世紀)の長い歴史の中で、学会を立派に育てて下さった先輩の方々のご努力に深く敬意を表したいと思います。そして、会員の一人として自覚を持ち、更なる発展への努力を続けて行きたいと考えています。

石丸 玲子 (ishi-mr@za.bb-east.ne.jp)

★ 私たちはイメージで物事を難しくしてしまうことがよくあります。今回の英語教育への提言では「工学」→「機械」というイメージから脱却して、もっと学習者主体の「効果的な機器の使用」について書かれていました。今回の実践報告はその提言を裏付けるが如く、それぞれが「機器」に振り回されない学習者主体の授業紹介であったと思います。今回の提言・実践報告を参考にして、より良い授業を目指していきたいと思います。

小林順子 (junkoba@0617@live.jp)